

第 1 回次期水源地域交流の里づくり計画検討委員会 議事録

1 あいさつ（田邊水政室長）

21世紀は水の世紀と言われて久しく、日本を含め世界でも、気候変動に伴う集中豪雨や渇水など、様々な問題が顕在化している。

神奈川県は、昭和22年に完成した相模ダムをはじめとして、都市部の水需要に対応した水資源開発を行ってきた結果、渇水の心配が非常に少ない、恵まれた状況であるが、これも一方では、水源地域の方々の、多大なご協力と犠牲によるものと考えている。

県では、水資源開発によって生まれた五つのダム湖を「やまなみ五湖」と名づけ、振興計画を策定してきた。最初の策定から今年で足かけ26年引き継がれてきたが、平成23年度から5年間実施してきた現在の計画を検証し、28年度から5年間の計画策定にあたり、ぜひ委員の皆様のお力をお借りしたい。

2 委員紹介

委員及び事務局構成員による自己紹介を行った。

3 委員長の選任

宮林委員が委員長に選任された。

4 委員会の公開及び傍聴要領の決定について

委員会は公開とし、傍聴要領は（案）のとおり決定された。

5 水源地域交流の里づくり計画の改定について

事務局から資料1に基づき概要説明を行った。

6 やまなみ五湖水源地域交流の里づくり計画 点検結果（報告）及び次期水源地域交流の里づくり計画策定の方向性について

事務局から資料2-1、資料2-2に基づき概要説明を行った。

7 意見交換

（宮林委員長）

ここからは委員の皆さんのご意見を伺っていきたい。まずは今までの計画で問題と感じられているところがあれば事実関係としてご意見をいただければ。というのも、これまでの計画はある意味総花的なところがあって、事業として可能性が秘められているものについては、全部盛り込んだ計画であったのだが、実際の事業実施にあたり、充実している部分もあるが、難しいところもある。

里の案内人についても、後継者問題や高齢化という問題があり、また、やまなみグッズについても新たに 17 品目が追加認定されたが、販売拡大にはつながないというような課題がある。

さらに、計画がソフト部門にシフトしてきて、それをやっていくためには、人材、いわゆるマンパワーが必要だが、なかなか充実しなかったというところがある。これは水源地の皆様から見て、地域で対応する人達が、どんどん少なくなってしまうという、そういう観点を持たれていますか。藤野の佐藤委員、どうでしょうか。

(佐藤委員)

私は、地元である藤野の里の案内人が誰かということについて、教えてもらうまで知らなかった。でも、その方と話したことは何度もあったのだが。つまり、里の案内人として活動しているイメージがあまりなかったということです。

確かに、その方もかなりご高齢であるが、里の案内人になれるような新しい人も出てきている。つまり、私も含めて団塊の世代くらいの方が、例えば、明日、自治体間交流事業で藤沢の方をご案内して川の遊びとか色々なことをやってくれる方がいるが、そういう方はすごく熱心である。

地域全体として、高齢化という傾向は確かにそうだが、担い手としては、リタイアして 60 台半ばから後半の人達が、新たに地元のためにやってくれる、その動きも感じています。

(宮林委員長)

里の案内人になれる人は、潜在的には存在するということですね。

(佐藤委員)

いると思う。やり方の問題。ところで、里の案内人になると、何かメリットがあるのか？報酬があるとか。

(事務局)

報酬はありません。

(佐藤委員)

名誉職ということか。

(事務局)

ボランティア的にご協力いただける方をリスト化させていただいている。

(佐藤委員)

お金による報酬ではなくても、やり甲斐とか、何かそういうものがないと。

動機付けが必要ではないか。

(宮林委員長)

この計画の当初は、里の案内人を広げていって、インタープリターの的に、里に入っていったら、必ず里の案内人が説明してくれるような仕組みを考えており、その結果として、案内料の実費が5千円というように、案内人の収入となるような仕組みを作っていこう、というところまで考えたのだが、そこまでは計画に書き込んでいない。里の案内人を連携させるために、協議会を作るとか、後継者を育てるためには教育研修が必要となるので、有料の訓練所や仕組みを考えたらどうかとか、里の案内人になりませんか？と逆にPRしていったらどうかとかいうことも前計画策定時は議論したが、そこまではなかなかできていない。

今後の課題だが、私個人としては、下流域で里の案内人を作ってもいいと思う。山梨県小菅村に源流文化学というのがあり、源流文化指導員というものを住民講師という形で作って、農業、林業、それから文化、川遊び、郷土料理というようなところを部門別に作って、青年団とか、婦人会とかシルバーパワーとかが参加して、いろいろな場面に広めることができる。専門性と、体験教育とを連携させて、それを広げている。さらに大学とも連携して、公開講座との関連を作る、ということをやっているが、そのようなことをやると、意外と持続性が担保できて、新しい人達が生まれてくるかもしれない。

そういった側面から、富山委員はどうでしょうか。

(富山委員)

私も長く里の案内人をやっているが、何年か前に、「里の案内人というのは何をするの？」と聞かれたことがある。実際に私が里の案内人を受けてから、地域で里の案内人として何をしたかといったら、基本的にしていない。名前だけ。ただ、以前は研修があって、他県に行って先進的な地域おこしの実例を学ぶ研修に参加させてもらったので、それは地域へ戻って、里の案内人というよりも、自分が地域の人間として、地域活性化のために参考にさせてもらったことはあった。でも、現実問題として里の案内人という名前で、何かをするというのは基本的になかったので、今言われたように、里の案内人という将来展望があったにせよ、現実的には、内容的にはあまり機能していなかったという印象が強い。

(宮林委員長)

ということは、下流域の人が上流域に入っていく場合も、里の案内人という人がいるということは、直接は知られていないことになる。上流域に行ったときに、案内をしてくれた人がたまたま里の案内人だったということはあるかもしれないが。本来、里の案内人がリストアップされていて、体験の内容によっ

て、この内容についてはこの方というように紹介してくれる機関、中間的に斡旋するような機関（場）があればつながると思うが。問題点としては、里の案内人に関するPR不足もあるが、つなげる場所がなかったということかもしれない。

（水政室長）

今、里の案内人の話が出ているので、若干補足すると、私どもの位置づけとしては、「交流の里の担い手となって、水源地域の魅力ある自然、郷土文化、地域に根ざした食文化などを都市地域住民に情報発信できる人材」を里の案内人として育成し、交流の日常化、継続化を図っていくということで、そういう専門的な名人、匠の技術を承継できる人材、そういった方たちにやっていただき、都市地域住民の方々との交流の中心になっていただくというようなイメージである。そういう意味で言うと、里の案内人の方々の専門的な分野を生かして、色々な交流事業などをやっていただくことをイメージしているが、やろうとすると、自分の専門的な部分だけやるのではなくて、教室を開こうとすれば、準備から、いろんな部分の手続きが出てきてしまう。そういう、マネジメント的な部分も必要となってくるので、非常に負担が大きくなってきているのが現実的な課題なのかと思っている。

（宮林委員長）

なるほど、里の案内人の連携が必要であるということはありませんね。

（佐藤委員）

今の話をもつていて思うのだが、里の案内人は報酬があればあるに越したことはないと思うが、それよりも、やはり自分のやり甲斐ということだと思う。結局はやり甲斐があることが見えなければ、里の案内人も機能しない。

例えば、明日やる私どものツアーでは、3人講師がいて、湖の歴史に詳しい人、川、水源全て含めて詳しい人、それから森の木工に詳しい人がいる。例えば、こういう人が里の案内人として登録されていて、我々は観光協会として、上下流か何かのツアーがあるときに、里の案内人であるそれらの人に相談して、それらの人は、里の案内人として、それこそ案内をする。報酬のことについていえば、ツアーでは今回謝礼を払うのだが、里の案内人に対して謝礼を払うこともできないことではない。里の案内人としてではなくても、ツアーの講師としてお支払いする。できないことではないと思う。

（宮林委員長）

岩澤さんは里の案内人について何か意見はありますか。

(岩澤委員)

実は今の専門的という話で、うちの夫が陶芸家なので、清川村の里の案内人という位置づけをいただいていると思うが、実のところ、里の案内人としての活動は、本人の意識としても全くない。それは富山委員と同じ意見です。

実際に里の案内人として、自分たちが何を依頼されて、何を託されているかという、そういった明確なビジョンが全くわからないので、何をしたらいいのかなと思ってしまう。里の案内人としての活動自体も、自分が里の案内人だという意識もないというところが問題であり、実際、里の案内人とは一体何だろうというのが、やっている側としてとても不明確で、これでいいのかというところが非常に疑問だったので、この場でご意見が出たことはすごく良かったのかなと思う。

(宮林委員長)

里の案内人の役割は明確であっても、それが本人や利用者（県民等）にうまく伝わっていないことという問題点がはっきりしたということで、それが明らかになったことは大変良いことだと思う。

(岩澤委員)

逆に言うと、専門的な部分でやって欲しいということであれば、うちでいえば、例えば陶芸教室をやって欲しいと言われればやれるのだが、それを、里の案内人本人が、コーディネートも含めて全てを一手にやることも委託されているのかどうか不明確でわからない。

さっき言った、色々な専門家というのが、本来の里の案内人であって、それをコーディネートする役割は、また別の方が行なうという方がスマートな流れなのではないか、というのが私の意見です。

(宮林委員長)

間に入って、コーディネートしてくれる方が居たほうが、やりやすいということですね。先ほど議論になった中間的な斡旋機関ということになるでしょうか。

(岩澤委員)

そうです。里の案内人に全て任されてやってくださいというのは、そうそうできることではないと思う。

(宮林委員長)

そうすると、下流域が、例えば水源地域で陶芸をやりたいよというので手を上げたら、それを受け取りコーディネートするところがあって、それをマッチングする、そんな役割の機関（あるいは人）が必要ということですね。

(岩澤委員)

そうです。里の案内人は下流域から来られた方に、専門性の知識をお伝えする、ということが本来の仕事だと思う。

(宮林委員長)

ということは、上下流の交流をマッチングする役割というのはどこになるんですかね。観光協会とか、あるいは里の案内人協議会などはどうか。そういう役割を担うことはできないか？

(佐藤委員)

まさにやっているところである。

(岩澤委員)

清川村で言うと、基本的には役場が 1 回受け取り、そこから下に話が降りてくると感じ。

(宮林委員長)

そうすると役場とのつながりを作ればいいのか。つまり上流の行政機関で斡旋をするということですね。

(岩澤委員)

役場と県とでつながればいいのかと思う。

(佐藤委員)

藤野観光協会の場合、上下流間交流をやっていて、里の案内人とはつながりが無い。私どもも案内人という位置づけがいまいまいちわからないところがあるのだが、これからはそれと密につながりを持つといいかもしれない。

(宮林委員長)

わかりました。今までも、里の案内人の位置づけはあったけれども、それがだいたい薄れてきているので、少しこれを地域の組織と連携するとか、位置づけを明確にする必要があるかもしれない。

それぞれの市町村には専門家のリストがあると思う。やまなみ地域の専門家は全部里の案内人として位置づけて、他の地域に対して、あるいは下流域に対して、やまなみ地域に行くと里の案内人たちがいるよという里の案内人モデル地域にする。それを売り物にして人を呼び込む。市町村等では専門家としてリストアップした人達を全て「里の案内人」というネーミングにして、里の案内人バンクと体験型やまなみ観光（やまなみレクリエーション）をつなげるよう

な仕組みはどうか。そうすると、里の案内人という一つのブランド化ができるのではないか。やまなみ地域を里の案内人がいる地域として位置づけ、ブランド化する。

ただし、里の案内人の人達には最低限こういったことをやってください、あるいは、こういう人を案内人としますよという要綱のようなものを何か作って認定する必要があると思う。これは、役場とか協議会でやれば良いと思う。そんな位置づけはできないものか。鷺尾先生どうですか。

(鷺尾委員)

県内のボランティアガイドのお世話をさせてもらっているが、一人ではなかなかできないものである。ボランティアガイドをやりたいという人が何人か出てくる。すると一緒にやりましょうという人が増えてきて、地域別にグループが出来る。地域にグループが出来ると、今度はお隣さんは何をしているのかしらと気になってくる。すると、お客さんというか、利用者を相互に紹介しようとか、隣に行ったらこちらに行ってくださいといったような、お互いに利用促進を図っていったり、今度はお互いの地域の人達が交流するようなボランティアガイドさんの案内コースを作ったり、あるいは、区域をまたがるような案内コースを一緒に作ったりするような広がりが出てくる。

専門性のある、里の案内人がたくさん居たとしても、それがどこかで繋がっていかないことには機能しないと思うので、繋がりが必要なんだと、それは皆さんがおっしゃっていることだと思う。

中間的な組織が必要だということになるかと思うが、例えば、その中間組織になるような人、つまり里の案内人コーディネーターみたいな人というか、「私は「匠」ではないけれど、人を繋げるのは得意です」という方いらっしゃると思う。町の顔みたいな方とか。そういう方が出てきて、ここの里の案内人と、あそこの里の案内人を組み合わせると新しい何かができるというようなことが起きるかなと思う。

抽象的な発言で申し訳ないが。里の案内人の、中身の見直しという発言もあったが、例えばそういうネットワーク作りが得意な方で、手わざがなくても案内人になれるようなものがあるかと思う。そういう方々に力を発揮していただいて、里の案内人のネットワーク化を図っていく取り組みが進めばいいんじゃないかと思う。

中間組織は、始めは行政が仕掛けなければ仕方がないと思うが、ゆくゆくはそれも住民の方へとつながっていくような動きがあればいいんじゃないかと思う。

(宮林委員長)

ありがとうございます。マッチングの上手い方っていますね。誰と誰をくっつけるという。そういう人もいっぱいいると思うので、リストアップして中

間セクターで結んでいくというような仕組みが作ればもうちょっと動き出すかなという感じがする。里の案内人についてはそんなところでしょうか。

(宮林委員長)

それでは他にどんな点からでも構いませんがご意見どうでしょうか。計画の目的は二つあって、これは継承していくということだが、水源地の活性化と、水源地の理解促進について、何かご意見ございますか。

(岩澤委員)

計画を見ると外に向けている視点が非常に多いと感じる。私は清川村に10年前に嫁いできたのだが、山梨県から来て感じたことは、こういった山が近いところに、こういった川があって、こんなに豊かなところがあるのに、実際に住んでいる人達は、自分たちが水源地域であるという意識がとても低いということ。おいしい水を水道から飲む、そのありがたみはわかっている、実際に自分たちが水源地を守っていくんだという、そういった意識が本当に村民の中にあるかといったら、全くないというのをこの10年間とても感じてきた。

下流域での意識促進というのは非常に大切だとは思いますが、大きな目的の中に、地域の活性化というのが含まれているのであれば、水源地域に住む自分たちが水源を守っていく、自分たちが水源地であるという意識付けというか、何かそういったことを促進していくというのも、この計画の中に位置づけていただいて、今後の事業に反映していただければ嬉しい、というのが私の意見で、今日ここで是非発言をしたかったことです。

(宮林委員長)

自分たちのところが水源地なんだという意識付けをする。自分たちで水源地を守っていく。あるいは守っているところに住んでいる。ことを認識することが大切と言うことですね。

(岩澤委員)

そう、宮ヶ瀬湖という大きなダムがあるが、清川村の半分くらいが、他の部落から移転をされてきた方で、実際に宮ヶ瀬ダムの周辺に遊びに行くかといったら非常に少ない。やはりそういうことではなくて、自分たちの村にはこんなにいいところがあって、自分たちの村はこんなに素晴らしいんだという意識付けをすることも、重点の施策の中に入れていただく、また、そういった形で、いや、宮ヶ瀬湖もあるけど、隣に津久井湖もあるじゃないかという、そういう交流もあって、自分たちの町づくりの中で発展していくということもあるかなと思っている。

(宮林委員長)

ありがとうございます。これは重要な視点だと思う。なかなかそこまでは気がつかなくて、下流域ばかり気にしてしまったというところはあったかもしれない。水源地間交流あるいは水源地住民交流と下流域との交流をうまく連携させること。さらには、日常的に水源地間交流を進めて、水源地に生きること、暮らすことの、大切さやすばらしさを認識することも重要ということですね。

(甘利委員(相模湖まちづくりセンター所長))

先ほどもお話があったように、水源環境の理解促進については、色々な手法をとることによって、可能性が高まるのではないかと思う。一方で、水源地域の活性化という目的があるが、これからどういうことをやるかによると思うが、「活性化」が果たして実現出来るかというところに、少し疑問があると思う。どういう言葉がいいかわからないが、他の言葉に変えたほうがいいのではないかと。イベント等を毎年実施して、それなりの人出はあるが、イベントをやること自体が単発的なことで、それをやったからといって活性化ができるかというところじゃないなという感じを持っている。その辺は県の考え方だとは思いますが、「上下流の連携強化」「振興の社会的機運の醸成」等、他の言葉のほうがいいのではないかという気がする。

(宮林委員長)

活性化の中には、いろいろな考え方があるとは思いますが、どうですか？

(鷲尾委員)

岩澤委員、甘利委員の発言を聞きながら思ったのだが、「交流づくり」という気がする。都市と水源地域の交流もあるが、水源地域内の交流もあるかもしれないし、隣の地域との交流というのものもあるかもしれないと感じた。

まず、都市はいったいどこを想定しているのか、というのがわからなかった。多分、横浜とか、海のあるところなのかと思うが、下流域を都市という言葉にしているのかなど。それだとそれほど都市ではないのではないかと思ったり、もっと神奈川県の水源地域として動きを作り出すみたいなことが活性化なのではないかなと思ったりした。

県の観光振興計画の委員をしていたときに、私は県民の方が県内で遊ばないと県の観光は進まないということを言わせていただいた。わざわざ中禅寺湖に行かなくても、もっといい湖が近場にあるわけだから、日々、遊びに行ける場所として、県内のそういうところをもっとアピールしていくことが必要で、県内の方にやまなみ五湖の良さをもっとアピールしていくことが大切であると思った。

あと、岩澤委員がおっしゃっていた、地元を知るということは、それも観光ツーリズムである。私が意見を申し上げなければいけないと思っていたのは、

水源ツーリズムの推進という、つい、どうしても外から人を呼んでくるということを考えがちだが、ツーリズムというのは、もっと近くの人を呼んでも構わないわけで、隣の人に遊びに来てもらっても構わないし、そこでいろいろな交流が生まれることがツーリズムだというふうに思う。今回、そういうことを見直していくと書かれているので、そういう、地域の中での交流づくりも含めて活性化なのかなと思った。どういう表現にするかわからないが、せっかく見直すのだから、甘利委員の発言のように、言葉も新しい言葉に置き換えることで、アピールできるかなと思った。

(宮林委員長)

ありがとうございます。この計画を策定した当時というのは、神奈川県全体を一つの国のように意識して、都市というのは横浜とかそういうところを位置づけて、丹沢は総合的な県民の共通財産と位置づけをしている。ところが、残念ながら、財産を持っている地元の人たちがこれを財産と考えていないという意見が出てきたので、これを県民全体の財産であるという意識付けができるような方向性を作らなければいけない。県における水源地の役割と位置づけを鮮明にすること。水源地は県土保全の最前線であるという認識ですね。

もう一つ、これは全国的に言えるが、飲水思源(いんすいしげん)ではないけれども、どうも水を飲むときに、上流のことを考えたり、上流域を意識したりする人は少なくなってきた。上流がしっかり管理されていた頃はいいけれど、今は管理されなくて荒れてきている。このことについては、きちんと実態を理解してもらう流れをつくらなければいけない。

それから県内の上流域の中における多様な遊びというのが僕は文化だと思っているのだが、お祭りなど色々なものがある。そういうものが、どんどん観光資源化しているところがある。それは観光資源ではなくて、暮らしの中で行われている文化であり、それが自然を守ったり、教育の現場になったり、多様な教育の場であり癒しの場であるという位置づけが必要なのではないか。そうすると、今、鷺尾委員がおっしゃったようなツーリズムにもつながってくるかもしれないので、地域内ツーリズムや環境教育の場あるいは健康づくりなどの場として見直していく必要があるかもしれない。ツーリズムも、必ずしも外から呼ぶだけではないものである。相模原については合併して相当広くなったところもあるので、これはむしろ水源地内や隣を意識することを通して、繋がり(交流)を作ることが非常に重要になってくるということかもしれない。

(水政室長)

今の話に関連して、都市地域住民というのをどう捉えるかというのは少しわかりにくい部分があるのだが、私たちの認識では、水源地域以外のところを広く都市地域というような形で捉えている。当然、横浜や川崎はイメージしやすい

いが、それ以外の県央地域とか、あるいは小田原の方まで含めて、要は上流の水を飲んでいる方達を広くこの計画の中では水源地域とそれ以外という形で分けているところがある。

地域の活性化の部分については、甘利委員がおっしゃった部分があると思う。この計画の中では水源地域の活性化と理解促進を二つ並列で置いているが、交流することによって地域の活性化につながっていくという部分があるという認識を私どもも持っている。そこは計画上は並列になっているが、交流が中心になって、その結果として理解促進につながっていくという部分があるというのは意識しているところである。

(佐藤委員)

甘利委員がおっしゃることはとてもよくわかる。イベントで活性化をどうするかということだが、藤野ではふるさと祭りが交流事業として打ち出されているが、活性化という意識はほとんどない。そもそも産業祭りという藤野の中にある色々な物産が出て、地元の人が買いに来て、わっと賑わったりするものだったが、それが今、ふるさと祭りになっている。それで、交流事業というか地元が活性化するということはなくはないけれど、交流事業であるということ意識してやっているわけでは全然ないと思う。ただ、水源地域の活性化については当然、色々な形でやるべきだということは私も賛成で、ちょっとコマースになるが、私もツーリズムで農業体験をやっている。さきほど鷺尾委員がツーリズムは隣から来てもツーリズムであるとおっしゃっていたが、これがまさにそうで、1回モニターツアーをやった。実はその場所は私の畑なのだが、参加したのは2世帯で、藤野に移住して3年目の人たちだった。その2世帯の人達は初めて藤野の人と話をしたと言っていた。そういう現実があるわけです。私は元々、農家民泊をやりたいかったのだが、民泊は難しいところがあって、今、日帰りで行おうとしていて、先だって説明会をして、これはJTBが全面的に協力してくれたのだが、水源地域に住んでいる人が、水源地域の価値をなかなか認識できないでいるというのは全くそのとおりなので、こういうことをやることによって、ああそうか、こんなことが都会の人には面白いことなのかという発見がある。

もう一つ、まだ出来ていないので大風呂敷は広げられないが、ツーリズムがうまく展開していくと、担い手がすごく元気になってくる。黒岩知事が言っている「未病」対策のような効果もある。これは神奈川で唯一農家民泊をやっている横須賀の長井に我々が視察に行ったときに、すごく言われていたことだが、担い手のお年寄りが元気になり活性化するという。

そういう意味で、活性化というのは、1年に1回イベントを打って、そこに金を出せば活性化になるなんてことは、僕はありえないと思う。やはり、こういう地道なことを通じての交流であるし、やる本人も価値を見出していく、やり甲斐を見出していく、そういう仕掛けが大事なのではないのかなと思う。そ

ういう意味ではやはり、地道ではあるけれども、そこにあるものをそのまま生かしていく仕掛けをどれだけやるかというところにかかってくると思う。

(宮林委員長)

そうするとつまり、活性化というのは、元気のある水源地づくりというような、元気というのは何かと言ったら、地域の人もこうやっていれば元気になるし、外から来た人達も、それに参加すれば元気になるし、それが持続することで元気な水源地域を作ることになる。そこで交流することが、水源地をつくることになるという、そういうイメージか。

(甘利委員)

適切な言葉は思い浮かばないが、今委員長がおっしゃったようなそういう趣旨の内容がよろしいかなと思う。

(宮林委員長)

基本的なところは、一つは、元気な交流による元気な水源地づくりという意識を持たせるような中身にすること。二つには、水源地域の理解促進について、水源地の人たちが自ら意識を高めることと、やはり県民全体が水源地域を理解し、守るという運動論に発展することを強烈にやる必要があると思っている。今、国に対しては源流基本法を作ってくれと要望しており、今、骨子を作っているのだが、やはり、源流が荒廃し、解体すると、国が解体することになるという、そのポイントも一つ置いておく必要があると思う。特に神奈川県は水源を大事にしている県なので、ここをおろそかにしてはいけないという意識を県民全体が持つようなシステム、仕組みができればいいのかなという感じはある。

それから、今、地方では若者の定住化という課題が出ているが、若者定住促進のようなものを入れる必要はないか。それが元気な水源地域作りにつながると思うが、可能性としてはどうだろうか。愛川町の和田委員はどうお考えか。

(和田委員(愛川町商工観光課長))

愛川町には、今、空き家が少なからずあり、これを利用して定住促進を図っていきたいと考えている。だから、定住促進を計画に位置づけるのはありがたいと思うが、一方で実現できるかどうか、次の検証のときに結果がでていくかどうかというところ、お約束はちょっとできないと思う。

(宮林委員長)

定住者の中には、何か得意の技術を持っていて、それが里の案内人になる可能性もあるのでは。

(和田委員 (愛川町商工観光課長))

遊休農地等があり、農業を体験して、愛川町で農業をやりたいという人が転入してきている。

(宮林委員長)

そういう作物なんかはほとんど自分で消費してしまうのか。道の駅に出していったりはしないのか。

(和田委員 (愛川町商工観光課長))

農友クラブという団体を作って、色々なところで販売はしているようだ。

(安川委員)

ちょっとよろしいですか。農業という点で言うと、津久井の場合は、農業をやりたいという若い人が、以前は自分が農業が好きで、個人で入り込んでくる人が何人かいた。ところが最近、企業が「お前ここで農業やれ」と言っていて、その代わりそれはうちのレストランで使うよ、あるいは、うちにはどこのホテルとの絡みがあるからそこで使うよ、という形で農業をする若い方が企業グループの一員として徐々に入ってきている。最近はそのらの傾向が多くなってきたのではないかと思う。

里の案内人の話に戻っていくと、ご存知のとおり相模原市は津久井4町と合併して政令指定都市になった。当初は相模原市内の都市部の人達が、大自然が我々の財産になったと喜んでいたようだが、最近、どうも私の聞こえる範囲では、相模原市内の都市部の人達が、それをすごく負担に感じるようになっていくという。で、水源地に遊びに来ていない、交流していない。僕も里の案内人をやらせていただいているが、全く皆さんと同じで、どうしたらいいかわからない。専門家の人達は居る。ただ、その人達も、自分の所だけを大事にしている。これは観光協会もよく似たところがあると思う。たとえば相模原の場合だと、元の旧津久井郡の4つの町にそれぞれの観光協会があるが、自分の範囲だけをやっている。だから、ここの観光協会と、ここの観光協会がというつながりがなくなって、パンフレットを作っても自分の所だけしか載っていない。つながりをもう少し持っていないといけないのかな。そういう気もしている。

(宮林委員長)

それはさきほど鷲尾委員が言ったように、地域内の交流、これをうまくやるということだと思う。それも仕掛け人がいないとできないので、それを案内人がイニシアチブをとってうまくつなげていくとか、仕掛けていく必要があるのではないかな。観光協会の役割も大きいように感じるが。

(佐藤委員)

そういわれると観光協会として面目を失う。私は相模原市の観光審議会の委員をやらせていただいているが、この前、相模原市は中はバラバラだと発言した。観光協会ですら一つになれないで、あっちこちでやっているのだから、それは当たり前だと。そうしたら行政の委員に「佐藤さん、もっとあっちこちで言ってください」と言われたのだが、まあそんなレベルである。それは本当になんとかしたいと思っている。

この活性化の中では、おっしゃるような移住促進を私は入れて欲しいと思う。やはり活性化は人がいなくなることが大きい。人がいなくなると土地が荒れる。動物が今すごく出ている。ヤマビルなんかもう庭まで出てきてしまっている状況だ。それはもう里が崩れているからだ。里が崩れる色々な理由がある中で、人がいなくなる、担い手がない、これは活性化の中でもっとも大事なことだと思う。

相模原市は人口もトータルで言えば増えているので、移住促進なんて今のところ考えていない。しかしながら藤野では移住促進協議会というのがすでに立ち上がって、もう2年くらいずっと話をしている。ただ、私たちは空家バンクを作ればいいのか、移住促進の支援策を立てればいいのかというふうには全く考えていない、藤野が好きで、藤野を大事に、言ってみれば里の案内人になるような、そういう意識を持った人達に来て欲しいと思っている。単なる支援策なんてことを言うと弾かれてしまう。中学生まで医療無料とかそういうことは考えていない。むしろここで面白いことをやりたい人に来て欲しい。

その中で今キーワードになっているのがリノベーションである。空家をどうやって自分たちの住みやすいようにするか、それから空家の賃貸、こういう仕組みづくりを考えている。今、建築家と不動産屋と一緒に話しているが、僕はリノベーションというのがひとつ大きなキーワードになると思っている。土地や畑なんかは遊休地が結構あるので、その仕組みをつくることは割りとできやすいが、住む所をどうするかというのが、ポイントになる。自分でリノベーションする人も現れてきているし、活性化の中で、移住促進は大きな柱になるのではないかと思う。

(宮林委員長)

ありがとうございます。新しいソフト的なところで、里の案内人というのは残すにしても、地域資源再生利用、これをどうやってやるんだというところで、ツーリズムというのは多様な交流連携をきちっと取ることだと。それには、地域内連携と、地域外との連携がある。それからそういう中で、定住促進があって、そこにリノベーションという考え方もある。それが地域の資源を守ることになるというような、そういうような意味合いを、ちょっと入れる必要があるということだと思う。地域をリノベーションすること。それが元気のある水源地づくりにつながると思う。他に何かありますか。

(鷺尾委員)

よろしいでしょうか。気になっているのは、丹沢湖ビジターセンターの廃止である。ビジターセンターはとても気持ちのいいところで、個人的に好きだからということではないのだが、ある一種のスタート地点が無くなるというのは、ちょっと残念なことだと思う。それはある意味、いろいろなことを考えていくと、止められないことでもあるのかなとは思いますが、一つの案として、町の案内所みたいなものがないかなと思っている。それは新たに案内所を作るのではなくて、おみやげ物屋さんとか、スーパーとか、八百屋さんとか、商店に一本旗を立てていただだけである。旗を立てていただいて、その旗の下にやまなみ五湖関連のパンフレットがただ置いてある、それだけでいいと思う。そうすると、今日は野菜を買いに来たけれども、来週はパンフレットに載っている藤野に行ってみようかと思うかもしれない。そこに旗が立っていて、ただその下にパンフレットが置いてあるだけで、極力お店の方にはお世話をかけない。できれば、ちょっとお客さんにお声かけなんかもしてくれると更にいいし、トイレも貸してもらえともっといい。何かそういうのがあれば。おそらくお客さんは車で来られると思うが、走っていて、あそこにもあのノボリがある、ここにもあのノボリがある、ということで、なんとなく、その地域の一体感が来た人にもわかるんじゃないかなと。とりあえず、困ったら寄ってみようという場所になれば。人間はそういう所に入って、例えばコンビニでトイレを借りても、借りるだけで帰る人はほとんどいなくて、絶対何か、ガム一個でも買うもので、だから町の案内所に寄って、道案内だけ聞いただけじゃ悪いから、じゃあジュースの1本でも買おうかということになって、店の方も潤うのではないかなと思う。そういうのができないかなと思っている。ご採用いただけるかわからないが。

(府川委員(山北町環境農林課長))

ありがとうございます。山北町ですが、丹沢湖ビジターセンターは、みなさんご存知のように玄倉地域というところにありました。実は、山北町としても、そこにいろいろと公共施設、森林館とかあったのだが、それも老朽化等で閉館になっている。そういう中で、今回の県の政策の中で、ビジターセンターを西丹沢に移すということで、今、町の方としても、民活ができないかということで、県のほうに要望している。ただ、なかなかコスト的な問題があるのか、難しいという状況だが、山北町は丹沢湖という一つの水源地域を守っている。先ほど活性化という言葉もでたが、益々減退していってしまう中で、なんとか5年間で活用方法について検討したいということで、県の方には申し入れている、そういう状況である。

(水政室長)

ビジターセンターの話については私も本当に残念に思っているところであるが、これから新たにハードを作ることはちょっと現実的ではないので、既存の施設を活用しながら、また、それに代わる拠点になるようなものをなんとか探して、交流の場を作っていければいいのかなど。例えば、山北町だと、丹沢湖の入り口のところ、246号線から入っていくところに道の駅があったりとか、そういったものもあるので、何かそういう既存のものを、うまく使っていただけるといいなというようなことは考えている。

(宮林委員長)

やまなみの、今、案内所という話があったが、そういうのもいいのではないかな。それでサイン計画を揃えて行ったりとか、共通の水源地の旗なんかも作ってリノベーションする。大体、やまなみ五湖自体が知名度が浸透していない状況があるので、そういう話もいいと思う。ソフトのところではそんな活動もしていたらいいのではないかというふうに思う。

(宮林委員長)

あと、グッズの話がある。せっかく 17 品目も新しく認定したのだが、なかなか売れない。これはどこもそうだが、ブランド性をもっと前面に出して「やまなみ」というのを県民に売らないといけない。やまなみのブランドがブランドになってないということに一つ問題があると思う。やまなみというのをこれから普及させるということも考えなければいけない。地域の中では相当頑張っているやまなみグッズが相当あると思う。僕はいくつか見たことがあるが、大変素晴らしいものも作っている。だから、これをもう少しうまく流通戦略に乗せる、その段取りを考える必要があると思う。前回の計画では、横浜のどこかにやまなみグッズを置く場所を作ったと記憶している。2ヶ月くらいやってそれなりに売上は伸びたが、それは持続していかないところがあった。したがって、関連する企業等のCSRやCSVと連携するなど、その辺ももう少し考えてはどうか。本来都市地域から来てもらって、ここでなければ買えませんよ、というくらいの強みがあっていいのだが、そうなるともうちょっと入り込み者が増加しないと難しいので、下流域の核との連携やつながり（地域間連携、婦人会や子ども会等の団体との連携など）を考える必要がある。

この議論で、今度は体験とか交流がブランドになっていく、そういうところが今後は必要になっていくのかなという感じを受けた。

多分、やまなみ五湖というのをもう少しブランド化していかなければいけないと思う。ブランドについて、何かありませんか？

(水政室長)

やまなみグッズに関しては、やまなみグッズのパンフレットを作ったり、そ

れも手にとってもらえないと全然周知にはならないが、それ以外には、名産展とか、あるいは水源地域キャンペーンというのを年1回やっていて、色々と出店する機会を私どもで用意させていただき、グッズ業者の皆様に出店していただいている。ただ、どうしても出ていただける業者も固定化してきている部分もあり、その辺を広くブランド化するというか、そういった部分というのは十分にできてはいない。ブランド化というのは、非常に難しいところで、やまなみグッズというもののブランド化をどうしていくかというところは正直私どもも悩んでいるところであって、グッズの数を増やすのか、あるいは逆に数を絞ってブランド力を高めるのか、その辺が悩ましいところである。

(宮林委員長)

今、農山村のブランド化について考えていて、生産と加工の知財化を進めようとしている。有名なシェフと連携して料理を作ってもらい、食材（農家の生産技術）と加工品（シェフの料理・術利用技術）をセットで、それ全体を知財として巻き込み販売するというもの。具体的には、有名なシェフが使う食材は、全て特定の農家が生産した野菜しか使いませんということで、生産と料理を一体化して商品ブランドとして売り出すというものである。ミラノ博に持って行っているが、それが日本食という世界遺産と連携して、ブランド化につながっている。もし、その料理が1食 2,500 円くらいで、売れるとしたら、その内の25%が農家にはいるということになるわけです。そのことが発展すると、小さな農家では対応しきれなくなり、地域の農家に生産技術と一緒に拡大していく。シェフが持っているブランド性と農家の生産技術を連携する中で、その質の保証を農大が分析して進める。その全体の流れを知財化にもっていこうというものである。

それから木材については、山北やその周辺の材というのは間違いなく良い材という認証を進め流通に乗せると良いと思う。丹沢の諸戸林業の材は歌舞伎座に使われている。それだけで、あそこの材は数倍の付加価値が付与され簡単に買えないほどである。同じ丹沢の材を、歌舞伎座で使われたという使用ブランドを形成すること。それをさらに広げていけばいいことになると思う。こうした関係をブランドにつなげ、流通に乗せていくことが必要と思う。

(宮林委員長)

あとマンパワーについては、定住の機会をできるだけ増やしていく必要がある。集落に新たな住民が一組入るだけで、だいぶ違ってくる。それを地道に1世帯ずつ発展させることで、新鮮な気持ちになるものです。

また、小中学校など学校との絡みはどうでしょうか。さきほど単発的だという話がありますが、大体定着して学校は毎年来てくれるのか。体験学習みたいな形で。

(佐藤委員)

多分もうかなり定着しているが、資料に書いてあるとおりに上流域の学校は全校生徒 30 人とかでキャパが非常に小さく、下流域に比べて難しいところもある。藤野で言うと、相模原市の「やませみ」という体験施設で、相模原市が、市のカリキュラムとして自然体験交流教室をやっている、平日はフル稼働に近く、小中学校の子どもたちが来ている。夏休みとか春休みとか土日とかは一般のお客さんを入れていて、今、横浜の方だとか、保土ヶ谷の方だとか、川遊びとかで泊まりにきている。相模原市が持っている施設だから、相模原市の方針があるわけだが、うまく利用してつなげれば、小学校自体のキャパが少ないというところも補えるのかなと思う。

(宮林委員長)

上流域に集客のキャパがないということか。廃校か何かないのか。

(佐藤委員)

廃校は大体使っている。今言った「やませみ」も廃校を使った宿泊施設だが、もうひとつ、NPO法人が運営している宿泊施設もあって、それも廃校を使っている。

(宮林委員長)

そうすると、ハードものはなかなか難しいとしても、うまく集客できるような仕組みを考える必要がある。水源地で体験学習をやるということは、子どもの教育にかなりプラスになる。小学校5年生の子どもの学力テストがあって、その点数を見ると、今、文科省が指定している体験学習をやっている学校がダントツで成績が良い。そういうところを見るとやはり、効果はあると思う。今、自然に触れる、川に入るということが、規制する方向で考えられている。規制で「やってはいけない」ということで、行おうと思ってもなかなかできない。ところが、やまなみ地域にはそういう体験をして遊んで育った人達がいるわけなので、そういう体験をしていける場所であるとともに、指導者も存在する、その点を売り物にする。こういうところを環境省の環境教育プログラム（ESD）に組み込んで、地域を売り出すということもよいのではないか。そういうところに里の案内人がいっぱい居て、指導を行うことができますよ、というところにつなげていくようにすると良いと思う。

(佐藤委員)

小学校間に限定しないで、受け入れてくれる施設が上流域にあるのであれば、そういう施設も活用していくのがよい。藤野でいえば宿泊できる施設が二つある。でないと、上流域の負担、小学校の負担が大きすぎる気がする。

(宮林委員長)

既存の施設を活用するということ。それは地域内連携ということで、お互いに情報を交換するとともに、体験プログラムの相互乗り入れや連携した指導者派遣などができるとういのではないかと。

(水政室長)

今お話のとおり、小学校間交流というのは、今、現状は「行って来い」という、下流域の小学校の人が上流域に行って、次は上流域の小学校の人が下流域に行くという両方向である。そうすると、どうしても上流域にある小学校は数が少ないので広がりようがない。ですから、今佐藤委員がおっしゃられたように、学校にこだわらずに、もう少し受け入れ側を広げていきたいと考えている。

(宮林委員長)

学校間ではちょっと上流域の方はまいてしまう。世田谷区と群馬県川場村が小学校の体験学習で連携している。世田谷区は 61 校あるが、川場村の方は 1 校しかない。そこでの交流は上流が加重な負担となってしまう。その様な中で現在世田谷区の 5 年生が移動教室で川場村に訪れるようになって、34 年になるが、今、180 万人の来訪者数があり、道の駅の売上げだけで数十億円となっている。それはこれまでの 34 年間の歴史の中で作られたものだ。以前は世田谷から川場まで車で 6 時間くらいかかり、あまり人も来ないようなところだったが、世田谷区のふるさとをつくるということで、そこに拠点を構えた。特に、子ども達の体験教育の拠点を構えたのが上手くいった原因だと思う。これから環境教育や体験教室も踏まえて、かなり重要な地域になってくるのではないかと。やまなみ地域というのが、まさにそういう体験型レクリエーションのメッカになってくればいいのではないかと。

(宮林委員長)

全般を通してどうでしょうか。新しく計画の中に入れておきたい、ということはありませんか。

(佐藤委員)

新しくではないのだが、自治体間の交流事業の仕組みがよくわからない。自治体間交流事業を私ども藤野の観光協会が今年初めて受託した。交流の相手として藤沢の長後公民館の人が来て、話を聞いていると、途中で一回、県から紹介されたところはあまり自分たちの希望ではなくて断ったとのことで、そして藤野のほうに回ってきたという。当初は私どもでないところが交流相手だったわけだ。長後の方に聞くと、県にはこういうことをやりたいという希望を出せないという。それと、私どもと長後公民館が直接話し合いをして、下見もして、こんなふうにやりましょう、あんなふうにやりましょう、それはいいですね、

こっちはこうしようという話をしたら、県と市が絡んできて、県の方から、いや、調整会議をやるからと言われてしまった。2度手間ではないのかなと。要は、事業をやる人と参加する人がうまく合って、どちらも楽しくやればいいのだが、そういう行政の縛りというか、位置づけというか、行政ってそんなにいちいち絡む必要があるのかと。行政には枠組みを作ってもらえればいいのか。実際の事業というのは、やる人がこんなことをやりたい、こんなことなら出来るっていうものをマッチングするならばいいのだが、なんというか、行政組織の、言うてはなんだけど、メンツみたいのがあるのかなんだかよくわからないのだが。

(事務局)

すみません。仕組みを複雑に作ってしまっているところがあるかもしれない。メニューを互いに出して、日程を調整して、現地で合わせるというくらいが本来はシンプルでいいと思うが、少ない予算の中で割り振りとか、先ほどの協議会で色々を行っている事業なのだが、推進協議会と地区協議会があって、そこで割り振りをやってもらって、いくらお支払いするという手続きを細かく作っているの、そういう負担をかけてしまっていると思う。執行の話、マッチングのやり方の問題なので、計画改定にどう盛り込むとか、そういったこと以前に改善できると思う。申し訳ありませんでした。

(高足委員(清川村産業観光課長))

今の上下流自治体間交流だが、マンネリ化している部分もあると感じている。私どもも実施しているが、清川村では、自治体と受入れ団体の負担感が大きいということもあるので、ここでは充実の方向で検討と書いてあるが、地元の負担感を改善できるような見直しを考えていただきたい。

(水政室長)

どうしてもその辺の部分の負担で、こちらの方から補助したり、お金の面でも限定された費用の範囲内しか出せないなど、現地の方でいろいろ準備をしてもらったりとか、ボランティア的に手弁当で対応していただいたり、地元の負担感が大きい状況になってしまっている部分もある。新しい体験教室とか交流の場を作っていかなければいけないという状況だが、そういった負担もかなりあるので、そこをどうやって広げていくかという仕組みを検討したいと思う。

(府川委員(山北町環境農林課長))

今、山北の方も交流を色々やっていて、子どもと親御さんとかメインに色々やっているが、受け入れについては、楽しんでもらうとか、そういう形で、おもてなし的なもので、地域の方にやっていただいている。今後は、下流域の人に、山北町というのをもっとPRして、来たいと思ってもらえる場を設けて、

そういう人達が実際に来て、山北の場合、ほとんど 90%が山間地なので、体験交流事業などで一緒に汗をかいてやっていけるような仕組みを作っていきたいなというふうに考えている。

(宮林委員長)

これは、下流域に上流域とつながる受け皿を作ることが必要かもしれない。例えば、上流域と下流域があって、下流域に明確に山北ファン、やまなみファンのようなグループを作る。そうするとそこがうまくつながって、ボランティアや色々なイベントのときに、情報が流れてつながっていける形になるとよい。したがって、下流域にそのような組織とまではいなくても、任意団体でいいと思うが、やまなみファンクラブのような団体ができればいいのではないかと思う。要するに、来た人にただ交流してもらっただけではなく、一度来てくれた人に、やまなみ交流証明書のような、あなたはもうやまなみ五湖住民ですよ、といったものを配布するとか。それで色々な交流でつながるといふ組織化ができれば、上下流域にとって大きな効果がフィードバックできるのではないか。

今、源流大学という大学を山梨県小菅村につくって、その源流大学の中の組織が、下流域にどうしてもつながらないという中で、下流域にNPOを作ること検討している。また、多摩川の源流には「NPOこすげ」を立ち上げた。これはすぐにできる。やまなみもそういう水源地だということを理解する人達がいれば、そういう団体あるいはファンクラブができるかもしれない。そこに何かあるたびに情報を流し、お願いすると、上下流域に同様な内容の情報が広まってくれる。それを捉えて色々な仕組みが作れる。ただ、その場合、最初はどうしても中間セクターというか、つなげる役割を持つセクターが必要になるので、行政がその辺を少し頑張ってもらって、出来上がった後は自分たちで、ということになると思う。そのセクターが上流域と下流域をつなげる核となるのではないか。セクターは上流と下流の両者に存在するとより密なつながりになると思われる。こういった点を少し考えると良いかもしれない。そうするとさっきのやまなみグッズも意外とそういう中で販売相手が見つかる可能性が出てくる。

他の点についてはどうでしょう。どんな視点からでも。大体議論のほうは出ましたか。

(佐藤委員)

議論ではないが、やまなみ五湖計画の検証結果をまとめるのはものすごく大変だったと思う。拝見してよく丁寧に色々な意見を拾ってまとめたなと感じた。今回の議論も多分、また汲んでいただいて、いいものができてくるのかなと。

8 まとめ

(宮林委員長)

大体出揃ったというところでまとめたい。いくつか議論があったが、最初の方に活性化という議論があった。これはやはり、もう少しみんなでやっていけるような、みんなが参加できるような、「元気のある水源地づくり」というような表現を検討したらどうかという議論だったかと思う。

それから、水源地の理解促進のところは、水源地内部の理解促進という意見がでた。内部に対してもきっちりやると同時に、外部に対しては、ここを潰したら大変なことになるよという位置づけも入れて、みんなの財産だから、みんなで守っていかなければいけないというところをもう少し強く出したらどうか。そうした中で、今までの議論を整理していくと、下流域、上流域だけではなくて、隣同士であっても、互いの問題点として理解できてつながるような、そういう交流ができたり、あるいは、グッズであったり、教育の場面であったり、様々なところで適用できるのではないか。

一つ忘れてはいけないのは、若者定住の場面をうまく入れて欲しいということがあったので、その辺もちょっと入れておいていただきたい。

それからビジターセンターの関わりで言うと、案内所という言い方がでたが、これもかなり大切な視点だと思う。あちこちに旗と言っていたが、まさにそういうサインとかそういうもので、「やまなみ」という言葉がたくさんでいくだけでだいぶ違うと思うので、そういったところも少し入れていただければというふうに思う。

それから最後に、里の案内人、これについてはかなり中身を精査して、そしてもう少しうまく整理して認識、役割、組織、評価、内容などを再検討する必要がある。その辺事務局申し訳ありませんが計画に反映していただくようよろしく願いしたい。

全部まとめ切れておりませんが、以上のようなことで見直しに入っていて、先ほど佐藤委員からも出ましたように、点検結果は非常にコンパクトにまとめられておりますので、改定計画についてもおそらくこの中の意見が相当盛り込まれて、新しい計画として出てくると思いますので、期待したいというふうに思う。そんなところで大体よろしいでしょうか皆さん。

そうしましたら、今日の議論はこの位で終わりたいと思う。

(了)